

# 薬草園の花だより

第24号

2020年(令和2年)8月26日発行

## ■第24号に寄せて

このごろはもはや普通になりつつある猛暑の夏ですが、それとともに今年は新型コロナウイルスとともに過ごす夏となっています。電車に乗っても買い物に行ってもほとんどの人たちがマスクをしているという異常事態。普通に出かけ、レストランで皆とワイワイと食事をしていた生活が変わっています。なんとか有効かつ安全なワクチンが開発され、安心して生活できる日々が一刻も早くとりもどされることを祈るばかりです。

このような人間界の事態には関係なく、薬用植物園の植物たちは元気に暑さをのりきろうとしています。立秋も処暑も過ぎ、やがてこの暑さも過ぎてしのぎやすくなっていくことあります。夏の暑さは難儀なものではありますが、しのぎやすくなってくるとなんとなく寂しくなるものです。今回は「行く夏を惜しみつつ」として、今年の夏の薬用植物園で元気に花を咲かせた植物たちの紹介もします。

この時期には薬用植物園内の「草楽館」に七夕飾りをするのを恒例としてきましたが、今年は残念ながら学生さんたちの入構も制限されていることからとりやめとしました。また、種々の行事が普通に出来る日々の来ることを期待します。



前回の「薬草園の花だより23号」にてユリの話をしましたが、盛夏の始まりを知らってくれるのがオニユリの開花です。植物の中にはせっかく生育の良いと思われる環境を作つてもそこには定着せずにとんでもないところで元気に育つものがあります。オニユリもそのような性質を持っており、本学の薬用植物園でも圃場の縁のブロックの隙間から育ったものが一番元気です。おそらく、ムカゴが落ちて育つものでしょう。黄花のオニユリであるオウゴンオニユリも咲きました。



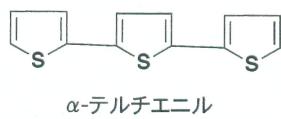
した。オニユリやオウゴンオニユリにはムカゴがつきますが、その鱗茎を食用にされるコオニユリにはムカゴがつきません。コオニユリにも黄花のものがありキヒラトユリ(黄平戸百合)といいます。このユリは江戸時代の園芸書には記載があったものの、その後見当たりらず、絶滅したのではないかと思われていましたが、やがて再発見されたという話もあります。ここには園長が自宅にて今年咲かせたものを示します。キヒラトユリはコオニユリの性質を持っているようで、ムカゴはつきません。また、前回触れたカノコユリの写真も示しておきましょう。カノコユリの花色は奇跡と言っていいほど魅力的です。カノコユリはオニユリととても似た花の形をしていることに気が付いてくださると思います。(日本薬科大学薬用植物園長／船山信次)

## ■今咲いています・見頃です

夏の園芸植物としてマリーゴールドとアサガオを紹介します。いずれも園芸植物ですが、実は薬用植物でもあるのです。

### 《マリーゴールド》

夏の日差しがかんかんと照りつける花壇にはマリーゴールド(キク科 *Tagetes* 属)が似合います。マリーゴールドの根からは $\alpha$ -テルチエニル( $\alpha$ -terthienil)という特殊な成分が分泌されます。ダイコンはネコブセンチュウにやられると筋がついて商品価値が下がりますが、マリーゴールドの分泌するこの成分はネコブセンチュウが嫌うことから、大根



とこの植物と一緒に植えると無農薬でネコブセンチュウを予防することができるといわれます。ただし、最近はこの成分の影響もあるかもしれないものの、共生する線虫捕食菌の働きのためという説もあるようです。

マリーゴールドとダイコンのような植物の組み合わせをコンパニオンプランツといいます。マリーゴールドにはいくつか種類がありますが、薬用植物園で咲いているのは、アフリカンマリーゴールド (*Tagetes erecta*) です。

### 《アサガオ》

アサガオ (*Ipomoea nil*/ヒルガオ科) は、もともとは奈良時代～平安時代の初めに遣唐使が薬用植物のひとつとして唐からわが国に伝えました。アサガオの種子を牽牛子（けんごし）と称し下剤としたのです。今もこの生薬は日本薬局方に掲載されていますので、興味のある方は御覧ください。ただし、牽牛子の作用は非常に強いものの、ひどい腹痛も伴うので使われなくなっていました。

我が国ではその後、薬用というよりも、その花の美しさを愛でるようになり、とくに江戸時代には大いにその品種改良が行われ、種々の品種が現されました。花のみならず、葉の形の変異も楽しまれたようです。多くの品種が知られていますが、写真にあるのは近年人気が高くなっている「曜白（ようじろ）アサガオ」と言われるものです。このアサガオは1970年代にアサガオとマルバアサガオとの交配によって生まれたとのこと。花弁の維管束部分（これを曜という）が白くなるのでこの名があります。

アサガオと同様に遣唐使が薬用植物としてわが国にもたらしたボタンやキクも今はむしろ園芸植物として知られるようになっています。ある植物が薬用植物となるには、薬効のあることはもちろんですが、その植物が大量に手に入ることも必要です。園芸植物と薬用植物とに共通するものが多い理由はここにあります。多くの薬用植物を観察するためには、野山をめぐるよりも薬用植物園をめぐるのが効率がよろしいです。薬用植物園では、薬用植物を観察したいという方のお役に立ちたいといつも考えています。



アサガオ（曜白朝顔）

## ■行く夏を惜しみつつ

暑い夏ですが、まもなく若干しのぎやすくなりそうな気配もあります。猛烈な夏の暑さには閉口するものの、セミの声がアブラゼミやミンミンゼミからツクツクボウシに変わってきたりすると、なんとなく寂しさもあるものですね。この夏に薬用植物園にて咲いていた花の一部を紹介します。

### 《ヒマワリ・ヒオウギ・ヤマユリ他》

夏といえばなんといってもヒマワリです。今年はとくにその種まきをしませんでしたが、圃場の何ヶ所からか生えてきたもの一部を残しました。また、皆さんは食用にされるアーティチョークの花を見たことがありますか。薬用植物園で



ヒマワリ



アーティチョーク



ヒオウギ



ヤマユリ



ヒャクニチソウ

はその花を見ていただこうと、今年も収穫することなく、花の咲くまでそのまま栽培を進めました。大きなしかも魅力的な色の花を咲かせます。ヒオウギが咲きました。やがてヌバタマと称される種子がつきます。そして、今年は薬用植物園周辺で例年になくたくさんのヤマユリが開花しました。来年は皆さんにこの様子を直接見ることができるようになるといいですね。最後に、前号にて苗の状態のものをお見せしましたヒヤクニチソウが見事にたくさんの花をつけたことを報告いたします。

## ■薬用植物園からのお知らせ

### 《様々な薬用植物が元気に皆さんの帰りを待っています》

残念ながら学生たちの大学構内への自由な入構の制限が続けられていますが、薬用植物園ではいつ皆さんに直に観察できるようになっても良いように植物の世話を続けられています。またキャンパスに戻られることをお待ちしています。

発行：日本薬科大学薬用植物園